『國民新報』1939年10月15日

[主張]　銃後の奢侈を恥ぢよ

　のに、をげてのののに、でなのをつたのをる。をひやをせびらかすのをる。なんとしいであらう。にのがつてえたかにえるのはどうしたことだらう。

　たるはをつてはならないのだ。それはのとにてなくてはならない。はのこと、やもにしなくてはならないのだ。これもはにはになるからである。やを一にらなければならない。それがのであらうと、からられたきのしであらうと、く[も]であるつててはならない。それだけのをむことになるからだ。をさへにげるではないか。がなんだ。がなんだ。をにけてくとか、にしまつてくとはんたるだらう。

　てはりはせでにはせよう。るべくをはせよう。けたならばぎはせればむ。をべておをしやう[。]のをび、のをいればなんでもないではないか。

　一[[1]](#footnote-1)のはのによつてなさるべきだ。おととのをいて、はげられない。るにそののたるがのにけるとはんたるであらう。

　一にはのをするがある。こののをしてこそのにふさはしいになることだらう。

　一し、一し、一して一することこそ、のをなすものであつて、ににしかくびけたいものである。

　おにのをぢよう。

1. 新聞では「般一民衆」と誤植されていたが、単行本『同胞に寄す』で修正されている。 [↑](#footnote-ref-1)